



現代人である私たちは、生まれたときにすでにバイオリンがあり、当たり前のようにこの楽器の奏でる音楽を聴いて育ちました。

しかし、歴史を遡れば、当然のことながらバイオリンが生まれるより以前の時代があり、また、まさにバイオリンが生まれた時代に立ち会った人々がいたわけです。

そんな時代に思いを馳せてみましょう。

## バイオリンが誕生した時代はルネサンスだった

バイオリンの歴史について書かれた本を読むと、この楽器の誕生について、たいてい次のように書かれています。

「バイオリンは 16 世紀の前半に突然、完全な形でこの世に現れた・・・」

まあ、要するに大まかな時期が特定できるだけで、その他の誕生の仔細はよく分からないということなのでしょう。

16 世紀前半といえ、**ルネサンス**も後半に差し掛かった頃で、西暦 1517 年、マルチン・ルターによる有名な『95 箇条の論題』に端を発した宗教改革の嵐に、ヨーロッパ全土が巻き込まれようとしていた時期でした。

初期時代のバイオリンというと、**バロックバイオリン**という言葉方からも、バロック時代の物というイメージがあり、そしてある意味それは正しいのですが、バイオリンが誕生したのは、時代区分としてはバロックよりひとつ前の、ルネサンスの時代だったのですね。

ではバイオリンが誕生したルネサンスという時代はどんな時代だったのでしょうか。そのまえに、ルネサンスより一時代前の中世に目を向けてみましょう。

\*註 ちなみに、以下に見出し的に、西洋音楽史の時代区分を示しておきます。

中世(9～14世紀)→ルネサンス(15、16世紀)→バロック(17、18世紀前半)→古典派(18世紀後半～19世紀初め)→ロマン派(19世紀前半～20世紀初め)→近・現代(20世紀～)

## 中世（9～14世紀）

現代の私たちは、音楽は聴いて楽しむものと考えています。何をいまさらそんな当たり前のことを、と言われるでしょうが、それが当たり前でなかった時代があったのです。中世はそんな時代でした。

中世ヨーロッパに於いては、キリスト教の信仰がすべてを支配しており、音楽も例外ではありませんでした。全能の神が創造した世界は、秩序ある数学的調和により成り立っている。音楽とは、その**世界の秩序や調和**を明らかにするものだーそれが中世ヨーロッパに於ける音楽観でした。

そして当時における作曲とは、この神の秩序を再現することであり、そのためにさまざまな理論化が行われたのですが、このようにして生まれた音楽は、純粹な音楽と言うよりは、**数学や哲学**といった側面が強かったのです。ですから、中世に於いて音楽は聴いて楽しいかどうかは問題ではありませんでした。それどころか、音楽に感覚的な喜びを感じることは罪とさえ考えられたのです。当然のことながら、当時の音楽の中心舞台は教会であり、主流はあくまで声楽曲でした。

中世には、フィドルという、バイオリンの先祖のような弓で弾く弦楽器が存在しましたが、広く普及することはありませんでした。

## ルネサンス前期（15世紀）

ルネサンスは、この中世におけるキリスト教支配の暗闇に風穴を開け、古代文化を復興させヨーロッパに夜明けが訪れた・・・というのが旧来の歴史観でしたが、最近

はこうした捉え方にもさまざまな見直しがされて来ています。曰く、ルネサンスにも中世的な旧弊は少なからず残っていた。また曰く、中世時代の12世紀にすでに古典文化の復興は始まっていた、等々。

それらの議論はさておき、15世紀に入ると、イタリアを中心に美術、建築、自然科学といった分野で、爆発的な発展を見せ、綺羅星の如く数多の天才たちが輩出します。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ミケランジェロ、ブルネレスキ、コペルニクス・・・枚挙に暇ありません。

ではこの時代、音楽はどういう状況だったのでしょうか。奇妙なことに、この時代（15世紀）、イタリアはめぼしい音楽家を生み出していません。当時、音楽の中心は**フランドル地方**（フランス北部からベルギーにかけて）でした。ルネサンスのイタリアが他の分野では数え切れないほどの天才たちを世に送り出したということを考えると不思議な感じがしますね。

それはともかく、ルネサンスの音楽とはどんなものだったのでしょうか。

いわゆるクラシック音楽ファンという方々でも、ルネサンス音楽を好んで聴くという人はそう多くは無いでしょう。好きな作曲家の話をしていて、「私はなんと言ってもモーツァルトが大好き」とか、「チャイコフスキーの切ないメロディーにはしびれちゃうわ」なんていえば、「うんうん私も」と話に乗ってくる人も少なくないでしょうが、「ジョスカン・デ・プレ（註1）のミサ曲は最高だね」とか、「デュファイ（註2）のモテットを聴くと鳥肌が立っちゃうよ」などと言ったら、オタクを見るような怪訝な顔をされるかもしれません。

とはいえルネサンスの音楽に、独特な魅力があるのは間違いありません。この時代の音楽を聴くと、とにかく**響きの美しさ**に圧倒される思いがします。耳に、心にしみ入るような美しさ。これは中世の音楽にはなかったものです。西洋音楽史において、現代的な意味での「音楽」が誕生したのは、この時代だと言えるでしょう。

ルネサンスの音楽は美しい。あまりに美しいけれど、整い過ぎて、後代の様々な音楽を知っている現代人にはどこか物足りない面があるのは否めないと思います。もちろん、そのことでルネサンスの作曲家を責めることはできません。そもそも彼らは同時代の人たちのために曲を書いたのであって、現代人のために作曲したのではないのですから。それに、絶えざる刺激に取り囲まれて暮らしている現代人の感性こそ、むしろある種の病理に蝕まれているのではないかと問われたら、果たして言下に否定できるでしょうか。

15世紀の音楽も声楽が中心でした。もちろん、弦・管・打、様々な楽器がありましたが、**器楽はあくまでも脇役に過ぎませんでした。**

この時代、まだバイオリンは存在しません。時代はまだバイオリンを必要としていなかったのでしょうか。バイオリンが誕生するのは、次の世紀（16世紀）を待つことになります。

（註1）Josquin Des Prez 1440頃～1521 ルネサンス最大の作曲家とされる。代表曲、ミサ「パンジェ・リングア」

（註2）Guillaume Dufay 1400頃～1474 初期ルネサンス音楽の巨匠。「ルネサンスのバッハ」とも言われる。

# 歌う

マエストロ

クレモナ留学記 ～工房は音楽であふれてる編～

ひたすら木と向き合う毎日、  
私たちの友だちは音楽です。  
マエストロの工房でも  
学校でも、**ミニステレオ**が  
置いてあって、いつでも  
CD やラジオが流れています。



マエストロの工房では、いろいろなジャンルの音楽と 30分おきにニュースが聞けるラジオを。そして飽きたら CD、といった具合。私たちの大分市の工房でも、いつもこんな感じで仕事をしています。国は違っても工房の雰囲気は同じ。

学校ではバロックから現代音楽、器楽・声楽問わずのクラシックと、ジャズやポップス、先生や生徒が好きずきに CD を持ってきて。ときには大音量！ 明らかにうるさいのに、そこは**声の大きなイタリア人**、それに負けない大声で、説明したりおしゃべりしたりして。（しかもジェスチャーつきで）

自分たちの好きな音楽がかかったら、もちろん合わせて歌い始めます。サビが近づくにつれてどんどん盛り上がって・・・

「いちばんいいところが聞こえなかった～！」  
なんてことも。

学校には作りかけの弦楽器だけでなく、ピアノやギター  
なんかも教室においてあるので、もちろんここでも誰か  
が弾き始め・・・歌います。



作業をしている生徒の後ろで、別の生徒が  
ギターを手に歌い出します（授業中・・・）

こんな歌声を聞いて生まれた弦楽器たち、いい音がする  
かしないかは歌い手次第?? イタリア弦楽器の音色の  
**謎が解ける**かもしれません。。

マエストロ

**Primo Pistoni**(プリモ ピストーニ)

: 現代イタリアを代表する弦楽器製作家の一人。  
国際的な弦楽器製作コンクールで3度金賞受賞。  
先日上海・西安に出張して中国の伝統文化に刺激  
を受けてきた。



## DALLA BOTTEGA

一頃グローバルスタンダードという言葉がしきりにもてはやされましたが、最近ではその行き過ぎに対する反省がいろいろな方面で始まっているようです。

所謂クラシック音楽といわれる音楽の分野でもご多分にもれず、あまりにも国際化、画一化されてしまった音楽を、歴史や地域、民族性などといった観点から見直そうという試みが定着し、相応の成果を上げています。

そうした潮流に倣い、バイオリンという楽器はどんなものであったのかを、あらためて西洋音楽史の流れの中で捉え直すのも悪くないのでは、ということで、今号から少し歴史的なお話をしていきたいと思います。

おつきあい頂ければ幸いです。